

学校法人桐朋学園アリオン江戸音楽振興金

第3回〈柴田南雄音楽評論賞〉講評

奨励賞 仲辻 真帆（なかつじ まほ）

奨励賞 新田 愛 （にった めぐみ）

選考委員長 船山 隆（東京藝術大学 名誉教授）

柴田南雄音楽評論賞の選考過程について簡単にご報告いたします。

柴田南雄は、1916年生まれで1996年にこの世を去った20世紀日本の最大の音楽家の一人です。今年は生誕100年目、没後20年目のメモリアル・イヤーにあたります。学校法人桐朋学園アリオン江戸音楽振興基金では、この記念すべき年に、これまでの歴史にのっとりながら日本における音楽評論の新しいステップのために、〈柴田南雄音楽評論賞〉を公募いたしました。ここでこれまでの経緯を簡単に説明いたしますと、アリオン音楽財団では1988年からアリオン賞のなかに音楽評論部門を設け、さらに1996年からは審査員でもあった柴田の名前をつけて柴田南雄音楽評論賞として独立して、その間に安原雅之、伊藤信宏、恩地元子ら多くのすぐれた音楽評論家を世に出してきました。この賞の受賞者の榑崎洋子さんや伊藤制子さんは、今回の音楽評論賞の選考委員になられています。

さて、今年の音楽評論賞の特徴は、従来の2編の個別的な演奏会評の提出以外に、柴田南雄という存在そのものをテーマにした音楽時評ないし音楽評論の執筆を条件にした点にあります。一人の音楽家をテーマに音楽評論の課題をしぼり込むことはいささか乱暴ではないかという意見もあると思います。しかし柴田南雄という存在は、作曲家・音楽学者・評論家・教育者・解説者という広大な音楽の領域の探求者であり、3巻にわたる〈柴田南雄音楽論集〉に見られるようにその探求と考察は、古今東西のあらゆる音楽にわたっています。今回の応募者たちの柴田南雄と〇〇という文章を読むと、各々の応募者が内的な要求によって自らの問題を論じていることがよくわかります。柴田の音楽と音楽観が、没後20年目にして若い世代に着実に浸透していることが実感できました。

私たち選考委員4名は、応募作8編（9編のうち1編は書類不備のため却下）を匿名のまま読み、その後意見を交換しました。批評の発想の仕方、テーマそのものの捉え方、文体の特徴、論点の整理の仕方、論理性などの問題について自由に論じあい、多少の意見の異なる点があったものの、割合すんなりと奨励賞の2編を選びだすことができました。

仲辻真帆さんの《優しき歌－柴田南雄と立原道造の「時間的建築」》は、柴田の初期

の傑作《優しき歌》に焦点をあて、柴田の音楽のリリシズムと立原のポエジーを分析した評論。仲辻さんは、立原道造の全集をひもときながら、ソネット形式の頭韻や脚韻の分析と歌曲の音の運動をむすびつけ、そこから両者に共通する透明なリリシズムを明らかにしようとしています。柴田と立原に共有の〈追分の風〉のような特質を描きだしている点は評価できますが、しかし《ゆく河の流れは絶えずして》までを持ちだして、〈引用〉について論じている点などはいささか勇み足であるように思われました。それ以前にこの文章にしばしば登場する〈時間的建築〉というコンセプト自体定義が不十分であるといわざるを得ない。〈植物学的〉という新しい用語をもちだすまでもなく、〈時間的建築〉の本質をもっとつきつめて考察することが必要であったと思います。しかし柴田の著作と音楽に丹念につきあい、その特質を《優しき歌》に関して明らかにした点は高く評価できます。仲辻さんの個評は、オーケストラ・ニッポニカの2015年2月16日のコンサートと11月28日の〈信時潔没後50周年コンサート〉であり、この応募者の近代日本音楽への一貫した興味が示されていて好感をもちました。

新田愛さんの《柴田南雄のポストモダニズム》は、柴田の《ゆく河の流れは絶えずして》とシュニトケの《交響曲第1番》の比較を通して今日における多様式主義を明らかにしようとした論考です。この論考のテーマ設定そのものには目新しいところはないけれども、応募者の目的は、この問題の論点を整理し、正面から誠実に論じようとする点にある。新田さんのまじめな態度はわかりやすい素直な文体によくあらわれており、またそのまじめな態度は資料の収集の仕方からもわかります。《ゆく河の流れは絶えずして》の楽譜は、まだ未出版であります。新田さんは柴田純子夫人から自筆譜を借用して分析しています。第3楽章のトリオの声楽部分では、宝塚歌曲とか映画音楽など多様なノン・シリアス・ミュージックの断片が引用されていますが、新田さんは、それらの引用の織物をひとつずつ解きほぐしてグラフ化しているのです。このようなまじめな分析の作業は高く評価されるでしょう。しかしながらその一方、コラージュとか多様式に関する美学的考察は深まることはなく、論点として出されているベリオ《シンフォニア》との相違点もあまり明らかにされず、今後の課題として残されています。個別的な演奏会評では、愛知県立芸術大学の学生オペラ《フィガロの結婚》がとりあげられたが、鋭い批評意識は感じられません。名古屋フィルハーモニー交響楽団のシュニトケとシヨスタコーヴィチを取りあげたコンサート評もいささか平凡。今後期待したいと思います。